



Rescue Dog Trainers' Association



東日本大震災に対する出動 報告書・同報告会要旨



平成 23 年 5 月 31 日

特定非営利活動法人 救助犬訓練士協会
(RDТА)

はじめに

5月31日現在、東日本大震災の死者は15,281名、行方不明者は8,492名（警察庁調べ）を数えております。改めて犠牲になられた方のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心からお見舞い申し上げ、一日も早い被災地の復興をお祈り申し上げます。

特定非営利活動法人救助犬訓練士協会（RDTA）は、平成23年3月11日発生の東日本大震災に際し、警察庁からの要請に応じ海上自衛隊救助犬チームとともに出動し、3月12日から3月17日まで災害救援（生存者捜索）活動を実施しました。

本書はその公式報告書というべきもので、日本財団の助成事業の一環として印刷製本の上、関係各部に配布させていただきました。また、大変僭越とは存じますが、諸外国に較べて遅れているわが国の災害救助犬の体制整備について報告書の中で提言をさせていただきました。

平成23年5月31日

NPO 法人救助犬訓練士協会 (RDTA)

理事長 村瀬 英博

目次

目次 はじめに

I. 東日本大震災に対する出動報告

RDTA 派遣チーム	4
出動報告	5
東日本大震災に対する出動の経過概要	9

II. 報告会要旨

次第／司会進行 大島かおり	16
ご挨拶	
NPO 法人救助犬訓練士協会理事長 村瀬英博	17
RDTA 派遣要請の経緯	
神奈川県警察危機管理対策室課長補佐 増田勝也	18
出動報告 山田チーム	
救助犬訓練士協会 国内渉外担当 山田道雄	19
出動報告 玉川チーム	
RDTA 理事 MRT 認定グループリーダー 玉川輝明	26
出動報告 所見・提言	
救助犬訓練士協会 国内渉外担当 山田道雄	30
救助関係機関	
海上自衛隊呉造修補給所給油所保安科長 1等陸尉 森田康博	33
救助関係機関	
藤沢消防署警備2課 高度救助隊隊長 塩澤雅司	35
救助犬チーム NPO 法人日本救助犬協会 川合一夫	36
RDTA 出動隊員から一言	
村瀬真平 村山健太 村瀬裕太	37
質疑応答	38

東日本大震災に対する出動報告



平成23年5月31日

RDТА 派遣チーム

山田チーム				
リーダー				
山田道雄		RDТА国内渉外担当 IRO世界大会'07出場 防災士		
ハンドラー		救助犬		
村瀬英博	RDТА理事長 IRO公認審査員 INSARAG・MRT合格 防災士 救助犬訓練士	エロス号		7歳 ♂ ジャーマン・シェパード IRO世界大会 第4席 IRO瓦礫搜索B段階合格 IRO広域搜索B段階合格
村瀬真平	RDТАオーストリア駐在員 救助犬訓練士	キュウ号		8歳 ♂ ラブラドル・レトリバー IRO瓦礫搜索B段階合格
村瀬裕太	救助犬訓練士	マニー号		4歳 ♂ ジャーマン・シェパード IRO水難救助B段階合格

玉川チーム				
リーダー				
玉川輝明		RDТА理事 INSARAG・ MRTチームリーダー 医師		
ハンドラー		救助犬		
大島かおり	RDТА訓練担当 IRO公認審査員 防災士 救助犬訓練士	あかね号		8歳 ♀ ゴールデン・レトリバー IRO瓦礫搜索B段階合格 IRO広域搜索B段階合格
村山健太	防災士 救助犬訓練士	ランディ号		8歳 ♂ ジャーマン・シェパード IRO世界大会 第17席 IRO瓦礫搜索B段階合格
田中義益	救助犬ハンドラー	アガタ号		7歳 ♀ ラブラドル・レトリバー IRO瓦礫搜索A段階合格 IRO水難救助A段階合格

出動報告

1 期間

- (1) 準備：2011年3月11日（金）14：46～12日（土）7：40
- (2) 出動：2011年3月12日（土）7：40～17日（木）16：30

2 活動場所

- (1) 現地活動拠点（BoO*）：宮城県名取市愛島笠島東台17 宮城県警察学校
- (2) 活動場所：宮城県名取市、岩沼市、仙台市及び亶理郡亶理町・山元町

3 出動チーム

2個救助犬 USAR*チーム（1チーム：4名3頭編成）

4 救助犬 USAR*チームの搜索成果

老夫婦1組（2名）を目視により発見救出したほか、生存者の発見救出なし

5 行動経過概要

3月11日（金）14：46	東北地方太平洋沖地震発生（M9.0） 出動準備
12日（土）7：40	RDTA 本部出発
13：10	名取市宮城県警察学校（BoO）到着
13日（日）～14日（月）	搜索救助活動
15日（火）～16日（水）	撤収、待機
17日（木）10：10	宮城県警察学校（BoO）出発
16：30	RDTA 本部到着

細部については、「東日本大震災に対する出動の経過概要」のとおり。

6 所見及び教訓的事項

(1) 全般

今回の出動は神奈川県警を通じて警察庁からの要請に基づくものであった。これはこれまでの当協会の出動で初めてのケースであり、我々の活動の位置づけが当初から明確であったので、全期間を通じ搜索活動、後方支援共に組織的な活動が実施出来た。

特に、災害現場から1時間以内の宮城県警察学校を現地活動拠点（BoO）として、宿泊、給食、通信連絡、輸送、犬の管理面すべてにおいて万全の態勢で活動することができた。また、終始海上自衛隊の救助犬チームと行動を共にしたことから、特に空路・陸路を問わず輸送について自衛隊の支援を得られ、迅速な現場進出を果たすことが出来た。

お世話になった神奈川・宮城両県警本部、宮城県警察学校、海上・陸上自衛隊の関係者の方々には心から感謝申し上げます。

* BoO：Base of Operation（現地活動拠点）

* USAR：Urban Search and Rescue（市街地搜索救助：瓦礫搜索）

(2) 救助犬の運用

我々の保有する災害救助犬は、生存している被災者（いわゆる生体）の臭気や生命徴候に反応して発見を告知するよう訓練されている。今回は地震と津波という二重災害の現場であったが、完全に倒壊していない家屋でも一階部分は天井近くまで冠水しており、生存者の所在は絶望的と思われた。その一方、津波の来ていない2階以上の区画や地震被害だけの倒壊家屋では瓦礫の隙間が相当あり、土石流の災害現場に較べてはるかに救助犬の運用には適していた。

今回の RDTA 出動チームには国内唯一の INSARAG* 出動認定犬エロス号はじめ出動経験豊かな救助犬4頭を含んでいたが、合流した日本救助犬協会（JRDA）の2頭を含め捜索において生体に対する反応はなかった。しかしながら、災害発生後の早い段階で救助犬の運用に適していそうな現場を選択し、人命救助部隊と共に救助犬を集中運用すれば、より効果的な生存者捜索が出来たものと思われる。この点、24時間以内に現場進出を果たしながら、情報が輻輳しているとは言え初動段階で直ちに捜索活動に移行できなかったのは残念である。

この教訓としては、前回の平成20年岩手・宮城内陸地震の出動時の教訓と重なるが、救助犬の運用について助言できるスタッフ要員を初動段階から県対策本部に派遣すべきであった。この際、救助犬は人命救助部隊（警察・消防・自衛隊）への帯同が原則となるので、要請による出動、自主出動を問わず対策本部で救助犬チームを取りまとめて臨機に再編成を行い、人命救助部隊に帯同させることが不可欠である。

(3) 現場における協同要領

今回現場において、救助犬チームは警察、消防、又は自衛隊に帯同し、一部指揮下に入る等臨機応変に対処した。しかしながら、現場では警察、消防、自衛隊は協同関係で統一指揮下になく、情報共有も不十分なため捜索活動上若干の齟齬が見られた。例えば、自衛隊がすでに検索済みの現場に後から消防が検索に入ることがあった。自衛隊の捜索結果が消防の現地指揮所に到達されていず、現場の家屋に残されている検索済みの表示が小さく自衛隊独自の部隊符号で書かれているため、消防の気付くのが遅れ結果的に無駄な時間を費やした。救助犬チーム側からの要望としては、このような広範、大規模な災害現場では効率的な捜索、情報共有の観点から、救助部隊は一つの指揮系統で運用されることが望ましい。また、情報共有についても、少なくとも現場のマーキング（情報表示要領）については国際捜索救助諮問グループ（INSARAG）ガイドラインで定める表示方法に統一することが、海外チームとの関係からも必要であると痛感した。（因みに2009年インドネシア・パダンの現場ではこのマーキングを使用）

(4) 出動用装備、器材等

警察学校に BoO が確保されていたが、現場の進出が海自最大のヘリだったので発電機、天幕等フル装備携行で出動したことから、期間中特に不安、不具合は感じなかった。ただし、現場に搬入可能な耐震防水仕様のノート型 PC（日本財団助成）をソフトウェアの準備不足から携行できなかったこと、VTR の充電装置を忘れたことは反省事項である。一方、今回新たに調達した膝・肘当て（日本財団助成）を携行したが、厳しい瓦礫状態の現場ではきわめて有効であった。

* INSARAG：国際捜索救助諮問グループ

初動段階で固定電話、携帯電話が長時間普通になり、出動に関する調整が困難となり迅速な出動に支障をきたす恐れがあった。また、現地進出後も常時電話による通信は不可能であった。災害時にも通話可能な衛星電話(または防災用携帯電話)を装備する必要がある。

さらに、今回特に不自由はなかったものの今後整備すべき器材として、水のろ過装置、個人携帯用放射線量計が望ましい。

(5) 後方支援その他

今回は自衛隊機で現場に進出し、現地では警察・陸自車両の支援を受けたが、現場への往復、災対本部との連絡調整等のため独自の機動力・輸送力の確保の必要性を感じた。今回のケースのような場合、可能ならば後方支援要員(記録要員を含む)を第2陣として車両で進出させることが望ましい。

医師である玉川リーダーが犬用に簡単な医療キットを携行したが、搜索現場で被災者の怪我の応急処置及び韓国救助犬の右足裂傷の緊急手術に極めて有効であった。また、チーム員8名のうち6名は日赤救急員・防災士の資格を有していたが、現場では諸々のニーズが起り得るので、出動チーム要員全てがこの資格を取得(更新)しておくことが望ましい。

7 提言

東日本大震災の防災全般にわたる教訓的事項については、阪神大震災と同様、国として徹底的に検証、分析され抜本的な対策が検討されるものと思いますが、その資とするためにも救助犬分野について若干の提言をさせていただきます。

今回の未曾有の大震災に対して海外からも数十頭の災害救助犬が救援のため派遣され、阪神大震災の時と同様世間の関心を集めました。わが国における救助犬の出動体制は官民共に不十分であり、およそ「防災先進国」とは言い難い現状にあります。

まず、諸外国では軍又は消防等の公的機関が救助犬を保有し、災害時はこれを中心として民間の救助犬チームが支援する体制となっています。しかしながら、わが国においては正式に災害救助犬を保有する公的機関はなく、僅かに警視庁が国際緊急援助隊用も兼ねて約3頭を保有しているに過ぎず、到底広範な被災地域における24時間連続の搜索は不可能であります。自衛隊では航空自衛隊が歩哨犬を、海上自衛隊が警備犬をそれぞれ数十頭保有していますが、救助犬の資格(IRO認定国際救助犬)を保有しているのは海上自衛隊呉造修補給所貯油所の警備犬2頭のみであります。消防は災害救助犬を保有せず、またその計画もないと聞いています。

一方、阪神大震災以降、民間ではかなり熱心に災害救助犬の育成が行われていますが、それぞれの犬関係団体がそれぞれの基準を作り認定しているのが現状であります。したがって、現在国内に約300頭居るといわれる救助犬のうち、これまで災害現場に出動してくるのはわずかに10数頭でその能力の格差も大きい状況にありました。今次大震災でも初動段階で現場に出動した救助犬頭数は、海外から救援に派遣された救助犬頭数と大差ないものと思われます。

このような現状に対し、まず国としての災害救助犬の出動体制を構築することが必要ですが、そのためには、警察、消防、自衛隊等の公的機関に救助犬の運用部門を確立し、その後あるいは併行して民間とのネットワーク化を図りつつ、官民一体となった運用体制を構築するのが望ましいと考えます。この際、救助犬の認定基準には、官民共通して適用されかつ国際的にも通用する国際救助犬連盟(IRO)/世界蓄犬連盟(FCI)救助犬委員会の定めた基準を採用するのが適切と思われます。

「最悪のシナリオに備える」のが危機管理の要訣であり、今次震災において改めて教訓としたところであります。しかし、質の高い救助犬の育成には少なくとも約2年は要し、その稼働期間も4、5年と短く、訓練士やハンドラーの養成も決して容易ではありません。常続的に一定数以上の民間の救助犬を育成確保するためには、補助犬（盲導犬、聴導犬、介助犬）と同様、国が民間に助成する仕組みが不可欠となります。一方、国内で大規模震災（地震の場合、震度6以上）の生起する頻度は数年に一度ですが、アジア・太平洋地域あるいは世界規模で見ればほぼ毎年のように発生している状況にあります。これらのことは、救助犬の保有、運用を一国の災害救援という観点のみでなく、国際公共財的な視点から検討すべきことを示唆してくれます。

費用対効果的な国の施策としては、①まず国際緊急援助隊チームへの編入を念頭に公的機関（警察、消防、自衛隊等）が国際レベルの救助犬を育成・保有する体制を確立し、②それと並行して国が民間における国際レベルの救助犬の育成・保有を助成、③大規模震災発生の際には、国内はもとより海外への国際緊急援助隊のチームとしても官民一体となって運用できる体制を構築することが適切と考えます。

以上、国としての抜本的な対策検討の資とされますよう提言させていただきます。

■ 東日本大震災に対する出動の経過概要

3月11日（金）

14：46	東北地方太平洋沖地震発生（M9.0）、RDTA 本部（藤沢市）の震度5強
15：00	情報収集をしつつ出動準備を開始
23：00頃	神奈川県警危機管理対策課経由警察庁から災害救助犬の派遣を要請、 2チーム（8名6頭）派遣を決定
23：30	海上自衛隊自衛艦隊司令部に航空機による救助犬チームの輸送を要請

3月12日（土）

2：40	海上自衛隊横須賀地方総監部から13日厚木基地発陸上自衛隊霞目駐屯地 行きのヘリコプター便を計画中、搭乗者名簿を送付されたいとの連絡
7：00	出動準備完了、以下のチームを編成 山田道雄チーム：村瀬英博・エロス号（7歳、ジャーマン・シェパード） 村瀬真平・キユウ号（8歳、ラブラドル・レトリバー） 村瀬裕太・マニー号（4歳、ジャーマン・シェパード） 玉川輝明チーム：大島かおり・あかね号（8歳、ゴールデン・レトリバー） 村山健太・ランディ号（8歳、ジャーマン・シェパード） 田中義益・アガタ号（7歳、ラブラドル・レトリバー）
7：40	藤沢市の本部を出発
8：10	海上自衛隊厚木航空基地に到着 犬（ケージ格納）、食糧・水、器材等を機内に搭載
9：00過ぎ	海自救助犬チームと合流 森田1等陸尉チームの編成：松元事務官・金剛丸号、藤井事務官・妙見丸号、 森事務官（ハンドラー）、平井1等海曹（通信）、村川2等海曹（後方支援）
10：00	海自MH-53Eヘリコプター 21号機、厚木基地を離陸
11：35	陸自霞目飛行場（仙台市若林区）に着陸
12：20	陸自東北方面輸送隊の12t車に人員、犬、物資を積み込み出発
13：10	宮城県警察学校到着 以後活動拠点（BoO：Base of Operation）となる
13：30	対策本部（宮城県警）からの指示、「県警側の準備が整わないので待機」
～15：30	設営、食事
15：30	夜間の出動に備えて仮眠
～19：00	
19：00頃	携帯ラジオのニュース （15時半頃福島第1原発1号機爆発、避難指示を半径20kmまでに拡大） 日本救助犬協会の川合氏以下8名（救助犬2頭、車両3台）が合流
22：30	宮城県警からの指示（明日の予定） RDTA2チーム（6頭）とJRDAチーム（2頭）：岩沼、亘理地区の搜索 海自チーム（2頭）：仙台市南、東地区の搜索

3月13日(日)

山田チーム

- 6:15 警察学校を出発
- 6:30 岩沼署に到着 JRDA チームと合流。
管区機動隊大隊長からの指示により、仙台空港の北方、名取側河口南岸付近の名取市閑上（ゆりあげ）地区での生存者・遺体搜索を計画
- 8:00 JRDA チームと合同、現場着。海岸線から 1.5km 地点の閑上大橋付近を搜索拠点とし、警察車両を駐車
- 8:40 機動隊小隊長からの指示「救助犬は自衛隊と一緒に搜索、救助は自衛隊又は消防が当る」
消防の現地指揮所で情報収集
(自衛隊との協同搜索：施設部隊が重機で搜索通路を確保した後に普通科連隊が搜索。35 普通科連隊は 12 時頃到着予定)
- 9:30 自衛隊到着までの間名取市消防本部の指揮下に入り、地元消防団と連携、
～11:30 犬 1 頭に 2 名の消防団がペアとなり、損壊家屋内の搜索を実施（この間余震が頻発）
- 搜索の状況**
搜索拠点から海岸に向かうにつれ家屋の損壊状況が激しくなり、海岸線から 1km 以内では殆どの家屋が基礎部分を残して津波で流失、頑丈な建物や障害物の所であれきの状態で堆積し、思わず広島原爆投下直後の写真を連想させるほど。がれきの隙間はかなりあるので人の臭気を取り易く救助犬の搜索には適するも前日までは水に浸っており、残存する建物も中に入ると、一階部分はほぼ壊滅状態で天井付近まで浸水していた痕跡があり。生体臭気の残存は難しく 2 階部分でなければ生存者の発見は困難。
犬は結構意欲的に搜索するも生体に対する反応は全くなし
- 12:00 昼食休憩後陸上自衛隊 35 普連の小隊に合流
～13:15 陸自部隊と一緒に閑上中学校に移動し、待機
- 15:00 陸自部隊は中隊長の命令により別の地区に移動する事になったので、
～16:30 消防と協同し閑上地区の残り半分の搜索を実施
(この間津波警報のため約 30 分中断し、一時避難)
- 16:45 付近を搜索中の住民から搜索の要請を受け、2ヶ所の倒壊家屋の搜索
～17:35 実施するも生体反応なし
- 17:30 アルジャ・ジーラ及びトロントスター（カナダのメディア）から取材
- 17:40 機動隊の作業終了まで待機
- 18:45 現場を出発
- 19:15 警察学校に帰着

玉川チーム	
6:15	警察学校を出発 車中で管区機動隊中隊長よりブリーフィング：坂元駅周辺には生存者がいる可能性があり、本日はこの地域を捜索予定。移動手段は徒歩
7:30	亘理警察署で命令受領の後出発 本日の作業計画：救助犬チームが坂元駅周辺の倒壊家屋の生存者を捜索する間、機動隊は遺体収容を実施。生存者が発見された場合、直ちに救助作業に移行
7:45	亘理郡山元町坂元に到着。 駅周辺には山側海側に多くの住宅が立ち並び、線路の東側の分厚い防風林のため、国道6号線から海を望むことは殆ど出来なかったとのことだが、今は東西3km、南北5km以上にわたる平坦な地表を見通すことが出来、防風林の樹木がまばらに残り、線路をまたぐ駅舎の高架橋が見えるのみ
8:00	地元消防団からの情報 (坂元駅東側(海側)の地域において救助犬による捜索を希望。6号線より山側については、津波による被害はなく、地震による被害も大きくない) この時津波警報が発令され、全員が国道上に避難。津波警報が頻繁に繰り返されるため、当初の捜索予定を大幅に変更。 その後2時間にわたって、津波警報の間を縫って、国道周辺地域の残存家屋を捜索。遺体数体が発見されたが、生存者なし。
10:00	行方不明の身内を捜索に来ていた家族からの捜索依頼があり、救助犬チームに機動隊3名が帯同し、6号線から二級河川戸花川沿いに東進。約1.5キロ、あぜ道を歩き現場に到着。20分にわたる捜索で、生体反応なし。
12:30 午後	捜索を終了し、津波警報下、帰路は山道を登り本隊と合流。 亘理町荒浜地区に進出したが、水に阻まれたため、この日の作業は終了。救助犬チームは、機動隊の作業終了まで亘理警察署で待機。
17:00	亘理署を出発
18:00	警察学校に帰着

3月14日(月)

山田チーム	
8:45	JRDAチームと合同、現場到着(警察車両の都合により現場進出が遅れる) 現場：昨日と同じ閑上地区
9:00	消防本部の指揮下、警察学校の学生数名と組み前日の更に海側地区の捜索開始。 前日より被害は甚大で残存家屋は数軒のみ。家屋の屋内、付近のがれきの中を重点的に捜索するも救助犬の生体反応、生存者なし。
10:45	津波警報発令(約7メートル)に伴い、捜索中断。付近の3階建てのビル屋上に避難。この間、運河の向こうに歩いている男女1組を発見、避難を勧告しビル屋上に収容。 屋上から海岸方向を観察するも津波到来の兆候見えず
11:55	警報解除、午前の捜索を終了
12:20	車両まで戻り、昼食、休憩
~13:20	

14:00	午前に続き捜索するも救助犬の生体反応、生存者なし。
15:40	途中から陸自35普連が捜索済みの表示（「35i」）を発見し、捜索を中止。
16:00	消防・警察の前進本部（公民館）に移動、待機（車両待ち）
～17:30	この間イタリア、英国、日本（協同通信）からの取材
17:30	現場を出発
18:00	警察学校に帰着
玉川チーム	
9:00	海自チーム（森田リーダー以下救助犬2頭人員6名）と合同、管区機動隊とともに現場進出 現場：亘理町荒浜地区（昨日まで津波の水が引かず、ほとんど未捜索の地域）
9:25	海自チームと玉川チームが2手に分かれ、海に向かうメインストリートを中心に、左右の地域を捜索。 「向うの赤い屋根の平屋に、おばあさんが一人取り残されているかもしれない」との住民情報をもとに、捜索を開始。道路に土砂が厚く堆積し、一歩農道に入るとひざ下までもぐるといふ悪条件下一步ずつ安全を確認しながらメインストリートから約500メートル進入し、盛土でやや高くなった土地に建てられた旧家に到着。
9:53	「誰かいますかぁー」の声かけに対して、2階の障子から高齢女性が顔を出し反応。2階への進入路を見つけ階段を上ると、比較的元気そうな老夫婦を発見。（夫は頸椎すべり症のため、やや不自由らしい。発災から約70時間、わずかに残ったペットボトルのお茶と、お茶菓子で耐えていた模様） 早速、飲み物と蒸しパン、スナックなどを給食。その後、約40分にわたり隣家2軒を捜索し、神社に至り水に阻まれたためここでこの地区の捜索を終了。 老夫婦救出の状況：まず、自力で動ける妻を1階まで誘導。機動隊員が背負い畦道を一步一步踏みしめながら戻るが、時に流れ着いた松の幹を乗り越え、膝まで泥に埋まりながら進むうち、警察無線で巨大津波警報発令の報（11:00）。救助犬チームの2名2頭を早急に退避させ、機動隊員と共に妻を誘導。夫は機動隊員1名と共にそのまま2階に残留。警察無線から高さ8メートルの津波情報、頭上では防災ヘリが「波が立っている」と報告する緊迫した状況の中で、避難路沿いにあった比較的健常そうな二階家に緊急避難することに決心。
12:08	通常の捜索活動にもどれ、の指示。
12:12	妻を収容。
12:50	夫収容の状況：RDTAチームとすれちがった海自チームリーダー森田1陸尉は、偶然通りかかった陸自4駆車を誘導しつつ、徒歩で救出に向かう。機動隊員が2階の部屋から屋根に搬出した夫を、森田1陸尉が携行のロープ1本で背負い、脚立で庭に降り立ち、畦道を徒歩で車道まで出て、4駆車から救急車に収容。 昼食中、軽トラックの荷台に乗せられた息子と母親が通りかかり、「足を怪我して血が止まらない、助けて」と訴え。玉川リーダー（医師）が息子を診ると踵の傷はかなり深く、厚底のスニーカーをつらぬいて「何か」が刺さったというので携行の医療器具で消毒、止血等応急処置を実施して救急車に収容。

午後 海に向かうメインストリートの両側 50メートル以内を管区機動隊と協同し、海自チームと左右に分かれて捜索する方針で作業を開始。
救助犬の生体反応、生存者の発見なし。

17:00 現場を出発

18:00 警察学校に帰着

19:00 宿泊中の韓国の災害救助犬1頭が右足の裂傷を負い、玉川リーダーが診察、縫合処置（8針）を行った。

～20:00 今後の行動方針について宮城県警本部、海自チーム（森田1陸尉）、JRDAチーム（川合氏）と協議

夜 RDTAとしては、発生後72時間を経過し地震に加え大津波の2重災害を受けた現場の状況からは、今後救助犬による生存者の発見は殆ど期待できなくなる。一方、静岡、山梨、長野等東海・甲信越地方で地震が群発している状況下、藤沢の本部に帰還し新たな災害に備えるためにも救助犬部隊の捜索は打ち切りとするという判断を述べ、JRDAを含めて合意を得た。
森田1尉が海自側と調整し、明日午後MH-53E便（時間未定）、霞目飛行場までは陸自便が設定される予定

ラジオニュース

（本日11時過ぎ福島第1原発水素爆発）

3月15日（火）

6:00

日本救助犬協会川合氏車両により、仙台市宮城スタジアム内のロシア及び韓国の国際緊急援助隊キャンプを訪問。玉川リーダーが韓国救助犬を再診、術後の経過良好を確認

午前中

JRDAチーム警察学校を撤収
海自森田チームリーダーの調整結果
①午後海自ヘリ便設定（時間未定）
②霞目飛行場までの輸送便設定
第1案：陸自車両
第2案：警察学校車両

11:00

海自から霞目飛行場使用禁止（汚染区域）の情報入手
ラジオニュースから米空母艦載機が放射能汚染で洗浄処理したとの情報入手
以上のことから民間団体のRDTAとしては、航空便が利用できない最悪の場合を考慮し、レンタカー又は知人車両による離脱案を検討

12:00

ラジオニュース

（福島原発から半径20km以内避難指示、20から30km以内屋内退避指示）

15:00

海自横須賀地方総監部から、19:00霞目発21:15厚木行で飛行便設定予定との連絡

15:00

海自横須賀地方総監部から19:00霞目発21:15厚木行で飛行便設定予定との連絡

夕刻

警察学校の電力一部復旧

18:00

雨のため本日のフライト中止

18:00

RDTA1名、海自1名玉川リーダー同行で岩沼市内総合病院にて持病治

～19：30
夜

療のため受診
警察学校の電力完全復旧

3月16日（水）

8：00

海自 MH53E ヘリ 16：40 霞目発で飛行便設定の予定

9：30

飛行便 18：20 発に変更

12：00

天候不良のため飛行便ホールド

15：30

本日のフライト中止、以後の調整は仙台駐屯地の自衛隊統合任務部隊（JTF）
が実施する

16：30

ラジオニュース
(天皇陛下の励ましのお言葉)

3月17日（木）

8：00

飛行便設定、海自ヘリ 11：45 霞目発 13：45 厚木着

10：10

警察学校発（陸自 12t 車）

10：53

霞目飛行場着

12：20

海自 MH53-53E ヘリ 29 号機霞目飛行場を離陸

14：55

29 号機厚木基地に着陸、放射線検査異常なし

15：45

海自航空集団司令官（畑中海将）に表敬挨拶

～16：00

16：30

RDTA 本部に帰着

東日本大震災に対する出動 報告書・同報告会要旨

日時：平成 23 年 6 月 24 日（金）

午後 3 時～ 5 時

場所：横浜桜木町ワシントンホテル

出席：78 名

司会進行：大島かおり



特定非営利活動法人救助犬訓練士協会
「東日本大震災救助犬出動報告会」次第

平成23年6月24日
横浜市桜木町ワシントンホテル

1. 理事長 挨拶
2. 神奈川県警察本部 危機管理対策課 挨拶
3. 出動報告
4. 関係救助犬からのコメント
海上自衛隊チーム
日本救助犬協会チーム
5. 出動隊員コメント
6. 救助関係機関コメント
7. 質疑応答

司会進行 大島かおり

本日はお忙しい中多数お集まり頂き誠にありがとうございます。

はじめにご参加いただきました人数に対しまして用意した会場が少々せまくご迷惑おかけしますことにお詫び申し上げます。

それではただいまより特定非営利活動法人救助犬訓練士協会、東日本大震災救助犬出動報告会を始めさせていただきます。本日進行役を務めさせていただきます私、救助犬訓練士協会訓練担当の大島でございます。いたらぬ点が多々あるかと思いますが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



ご挨拶



NPO 法人救助犬訓練士協会
理事長

村瀬 英博

本日はご多忙の中、大勢の皆様にお集まりいただきまして
ありがとうございます。
皆様周知のとおり、東日本大震災は、まだ復興途上にあります。
今朝の新聞にも、警視庁の発表では7,347名もの行方不明者が記されてあり
ました。
災害はまだまだ終わっていません。
ここで黙とうを行いたいと思います。

黙祷・・・。

私たちとしてはこの時期に報告会を行うのは、時期尚早と思う反面、
出勤して体感・体験したことをお伝えしなければならない、そしてこの時期だ
から皆様に分かって頂けるのではと、思い悩んだ末、開催を決意致しました。
本日ご出席頂いている方々の中にも、現地に出動された方が大勢いらっしゃ
います。
それぞれの立場や役割を担って、現地で活動された方々の貴重な体験から生
まれたご意見や思いのままを是非お話し頂きたく、宜しくお願ひ致します。



RDTA 派遣要請の 経緯



神奈川県警察危機管理対策課
課長補佐
増田 勝也

神奈川県警察危機管理対策課の増田と申します。

私からは、神奈川県警察の救助部隊の活動と今回、村瀬さんに現場に行っていただくお願いをした経緯についてお話をいたします。

本県の広域緊急援助隊は、発災直後に警察庁からの派遣要請があり、福島県相馬警察署管内で救助活動を実施しました。

派遣された中隊長は、相馬警察署長に「困難な場所であっても、生存者のいる可能性のある場所で活動したい。」と依頼したようですが、スライドでも見ていただいたように、悲惨な現場であり、生存者を発見することはできませんでした。

警察の広域緊急援助隊は、3日間は自活で救出救助を行うことが原則です。部隊員は、車で寝泊りし、3食をアルファ米で過ごしましたが、部隊員の士気は高かったと聞いております。

次に、村瀬さんに派遣をお願いした経緯ですが、発災当日、私は警察本部で事務をとっており、揺れが収まると同時に、警察本部の警備本部要員として、県内の被害状況の把握や機動隊の派遣、主要駅等での帰宅困難者への対応等に当たりました。その最中に、警察庁から「神奈川県警で囑託している救助犬を現場に派遣できないか。」という電話を受けました。

その時、私は、とっさに断ろうと思いました。なぜかと申しますと県警が囑託している救助犬については、「神奈川県内に災害が発生した場合に警察の部隊と一緒に捜索活動をやっていただく。」という約束があります。したがって県内の災害であれば、「現場のどこどこで待ち合わせして、一緒に活動をお願いします。」というお願いができるのですが、宮城県への派遣であったため、囑託のルールと違う。どうしようかと思ったわけです。その時に、村瀬理事の顔が浮かびまして、平素から救助に積極的であり、「絶対に断らないだろうな。」と思い、上司に、要請の依頼があった旨と県警察の囑託救助犬の派遣としての要請はできないが、現場に行けるか確認します、と報告して、現場に行っていたいたわけでありました。

従いまして、県警察として組織的な対応ができなかったため、私としては、宮城県警の方に「村瀬さんの救助犬が行きます。よろしく願いいたします。」というお願いの連絡しかできませんでした。何とか無事に帰ってきていただき、ありがたいと思っています。

神奈川県警察では、今回の災害の反省教訓事項を検証して、県内における津波発生時の各種対策を推進中であります。

被災県の被害状況等について視察をしてまいりましたが、被災県では、ご承知のとおり、多くの住民の方が亡くなられているほか、避難誘導中の約30人の警察官も殉職・行方不明になっております。

海岸を管轄する本県においても他人事ではなく、関係の各自治体等と連携して、早急に津波発生時の避難誘導等の対策を実施することとしております。

最後になりますが、先ほどお話された救助犬の河合さんから、「全国の救助犬がひとつになって前進したい。」という言葉がありました。神奈川県警察では、災害救助犬を保有しておりません。したがって、県内で災害が発生した場合には、救助犬の皆さんと一緒に救助活動を実施することとなります。ぜひ、私からも救助犬の皆さんの益々のご発展をお願いしたいと思います。

出動報告 山田チーム



救助犬訓練士協会
国内渉外担当
山田 道雄

東日本大震災に対する出動報告について発表いたします。報告書は16ページからなり、写真は約70枚をパワーポイントにて皆様に極力多く現場の状況を追体験していただくということで発表させていただきます。

出動の経過と出動に伴う所見、教訓的事項を申し上げた後、最後に僭越ですが、提言と致しまして国に対する施策の提言を申し上げますが、正確を期すため実際の報告書の文章をそのまま読み上げさせていただきます。

出動の期間ですが、準備期間として地震発生後の3月11日14時46分から翌日の7時40分まで、直ちに準備にかかりました。

実際の出動は翌12日7時40分から17日木曜日16時30分の間で、

正味6日間に亘る行動でございました。活動場所は宮城県名取市にあります、宮城県の警察学校を現地活動拠点、所謂 BoO ベースオブオペレーションと致しまして、宮城県名取市・岩沼市・仙台市及び亘理郡亘理町山本町で搜索活動を実施いたしました。

出動チームは2個救助犬ユーザーチームということで、1チームが4名3頭編成からなる2チームで構成いたしました。救助犬搜索ユーザーチームの成果であります。老夫婦1組2名を目視により発見救出した他、救助犬による直接の発見者はありませんでした。2チームの内、私をリーダーとする通称山田チームは、村瀬理事長・長男真平・次男裕太のハンドラーの下に救助犬3頭で、救助犬は村瀬・エロス号、これはご承知のとおり IRO 世界大会第4席の実績をもち INSARAG・MRT 唯一の合格犬でジャーマンシェパードです。ラブラドル・レトリバーのキュウ号8歳・村瀬真平、IRO 瓦礫搜索 B 段階合格。村瀬裕太・マニー号4歳のジャーマンシェパードで IRO 水難救助 B 段階に合格をしております。今回の出動はマニー号は初めてでございます。エロス号は過去に2年前のインドネシアの地震、キュウ号につきましては3年前に岩手宮城内陸地震の出動実績を持っております。もう一つの玉川チームですが、協会の理事でもありまた INSARAG・MRT の認定チームリーダーの資格を持っており、且つ又ドクターでもあります。玉川理事をリーダーとして大島かおりあかね号も IRO 瓦礫・広域 B 段階それぞれの資格を持っております。なお、大島かおりハンドラーは IRO の公認審査員でもあります。また村山健太ランディ号も IRO 世界大会17席の実績を持ってありますが、残念ながらこの出動後まもなく急逝いたし

ました。心から冥福を祈りたいと思います。田中アガタ号、7歳のラブラドル・レトリバー、いずれも瓦礫・水難救助 A 段階に合格しておりますが今回出動は初めてでした。あかね号につきましては、過去にインドネシア、岩手宮城の内陸地震等出動経験豊富であります。

行動経過概要です。3月11日金曜日14時46分、東北地方太平洋沖地震が発生いたしました。観測史上はじめての M9.0、直ちに出勤準備の後12日土曜日7時40分、RDTA 本部を出発。途中海上自衛隊ヘリ・陸上自衛隊車両等で移動いたしました。13時10分名取市宮城県警察学校に到着いたしました。13日から14日まで2日間搜索救助活動を実施。15日から16日までは撤収、待機。17日木曜日10時10分宮城県警察学校を出発し、陸上自衛隊車両・海上自衛隊ヘリで移動の後、16時30分 RDTA 本部に帰着いたしました。

それぞれ日ごと搜索活動の内容について申し上げます。

尚地震発生日を Day1 (デイワン) と呼称しております。

デイワン：3月11日金曜日10時46分地震発生、RDTA 本部の藤沢市の震度は5強でした。15時以降情報収集をしつつ出勤準備を開始いたしました。固定電話・携帯等不通の為なかなか連絡がとれず23時頃だったと思いますが、神奈川県警危機管理管理対策課経由警察庁から災害救助犬の派遣を要請されまして、2チーム8名6頭派遣を決定し、東北道を移動する事を考えておりましたが、東北道は完全に閉鎖されているそれと途中の被害状況が不明であるということから不安を感じ又この時点で半日以上掛かるのではとの事で、自衛隊のヘリコプターによる空路の移動を決断しまして23時30分

ごろ、海上自衛隊自衛艦隊オペレーションに航空機による救助犬チームの輸送を要請いたしました。

ドイツウ：3月12日土曜日7時出動準備完了。2チーム編成を完了いたしました。7時40分藤沢市本部を出発。8時10分海上自衛隊厚木航空基地に到着。9時過ぎに海上



厚木基地到着

自衛隊救助犬チーム6名2頭と合流。10時海上自衛隊MH-53Eヘリコプター21号機にて厚木基地を離陸。11時35分仙台市若林区陸上自衛隊霞目飛行場に着陸。12時20分陸上自衛隊東北方面輸送隊12t車により移動をしまして、13時10分宮城県警察学校に到着いたしました。以後ここを活動の拠点と致しまして捜索活動に従事いたしました。



機内に搭載

この写真はMH-53ヘリコプターの機内に救助犬を搭載したところです。

これが海自の機内でケージ内に3頭行儀良く納まっています。

MH-53E21号機厚木基地離陸寸前のところです。これは同じく霞目飛行場に着陸したところです。まだローターはまわっている状態です。



MH-53Eヘリコプター21号機



霞目飛行場着

このMH-53Eは海上自衛隊最大の輸送ヘリコプターであり、今回は私どもと海上自衛隊の救助犬とあわせて8頭14名のまさに救助犬の専用輸送機になりました。尚この飛行場は海岸から約10キロ離れており、津波は6キロから8キロまできたようですが、津波の被害はございませんでした。



陸上自衛隊12t車にて移動

陸上自衛隊東北方面輸送隊12t車に荷物を積み込んでいるところです。



宮城県警察学校（活動拠点）

これはBoOとなりました宮城県警察学校であります。これが体育館でこちらが本庁舎、私たちはこちらの教室の方に宿泊を実施いたしました。なおこの警察学校も海岸から8キロのところであり、ちょっと高台にありまして津波の被害はありませんでした。停電でしたが、自家発電で必要最小限の電気は確保されております。

井戸が掘られてあり緊急時の防災拠点を想定して作られたようで、井戸水によってトイレの排水等はそのを利用したという事でありました。

13時30分対策本部宮城県警からの指示、県警側の準備が整わないので待機ということで私どもは取り敢えず自分たちの居住スペースとなる設営、食事、犬の居る場所も含めて設営をしました。15時30分夜間の出動に備え仮眠いたしました。このころ唯一の情報源は携帯ラジオであり15時30分ごろ福島第一原発一号機爆発、避難指示が半径20キロメートルまでに拡大したという情報を入力しております。19時ごろ日本救助犬協会(JRDA)の川合氏以下8名の方が私どもを訪ねて参りまして協議の結果、以後私共と行動を一緒にするという事で、合流しました。

22時30分宮城県警から翌日からの作業の指示がありました。

今から2日間に亘る各チーム毎の捜索状況をそれぞれ2日ごと区切って申し上げます。先ず山田チームの捜索状況ですが、



出発準備

デイスリー：3月13日 日曜日 6時15分 警察学校を出発、

6時30分 管区機動隊大隊長からの指示により名取市閑上地区での生存者・遺体捜索を計画。JRDAチームと合同で実施いたしました、「閑上」これは大変難しい字ですが、門構えの中に水と書き「ゆりあげ」と読みます。

9時30分 自衛隊到着までの間、名取市消防本部の指揮下に入り地元消防団と連携、犬一頭に2名の消防団がペアとなり、損壊家屋内の捜索を実施。この間余震が頻発しています。

12時 昼食休憩後陸上自衛隊35普通科連隊の小隊に合流。部隊と一緒に閑上中学校に移動し待機、15時 陸上自衛隊は別の地区に移動したので消防と協同して閑上地区の残り半分の捜索を実施。この間津波警報のため約30分 中断し一時避難を実施しております。16時45分 付近を捜索中の住民から捜索の要請を受け、2ヶ所の倒壊家屋の捜査を実施するも生体反応なし。

18時45分 現場を出発、19時15分 警察学校に帰着。

現場には家族の方が2・3入っていらして行方不明の方を捜索してくれと突発的な要請が多々ありました。これは玉川チームにもあったかと思えます。

スライド写真のご説明をしたいと思います。

これは警察学校で向かい側はスーパーです。閉店しています。警察学校のグラウンド前でこちらが正門で警



出発準備

察車両を待っているところです。出発準備完了というところで、犬たちも心なしか興奮気味です。



犬たちも準備完了

これは閑上地区の入り口で、丁度こちらが閑上大橋という名取川の橋になっています。歩道橋の上の人が



閑上地区入口付近

集って居ますが、これは陸上自衛隊の偵察要員が現地を偵察しているところです。消防車が止まっておりまして、こちらの方が被害甚大なので、こちらが海ですので津波はこちらから来てこの付近が障害になりブレーキがかかってとまった。こちらの方にも入っています。こういう状況です。これは閑上地区の入り口を



地元消防と共同捜索

入ったところでメインストリートです。このように水がまだ残っております。この辺の道路は道としての機能になっていますが、これは午前中



メインストリート付近

に陸上自衛隊の施設部隊がドーザーで瓦礫を整理し、やっと我々が入れられるような道を確保して有りまして、最初からこういう状態ではありません。これはメインストリートの入り口ですのでまだ建物等はしっかり残っているものがあります。消防団と捜索要領について協議しているところです。



IRO 認定犬キング号と JRDA 川合氏

これは河合さんとキング号です。ちょっと入ったらこのように損壊の程度がひどくなり、道なき道を、瓦礫をかき分けて進入してゆきます。これは裕太マニー号ですか、ちょっと



IRO 認定犬マニー号と村瀬裕太

と注目したら、ここに水の痕がある、ここまで津波が来たということです。ここが汚れていますが、一階部分は全部津波でやられていますので、そこを捜索しているという事で



IRO 認定犬キュー号と村瀬真平



INSARAG 認定犬エロス号と村瀬 理事長

す。生体反応はありませんでした。

これは真平キュー号。村瀬・エロス号か、この場所はおそらく水産加工工場か何かだと思います。こういう工場がいくつかあるのです。この



残存家屋が少なくなる

平らなところは建物の土台部分でありまして土台部分を残して、全部建物の上の部分は津波で持ってゆかれて、瓦礫状態になっています。しっかりしたこのような鉄筋のビルあたりはところどころ残っているような状況です。

これが関上地区の観光レジャーマップです。

関上というのは大変昔千年ぐらい前天皇陛下が来られ非常に景色のよいところで、お寺の門の向こうに海が見えたというところから門構えの中に水という字を書き、ゆりあげと



観光案内板も空しく

読ませたとの大変由緒ある地名で景勝の地だったのですが、看板のみが健在であとは無残な状況を呈しておりました。



搜索を終えて



搜索拠点で待機（関上大橋付近）



犬も小休止

写真は疲れ果てて引き上げて帰って来るところです。これはキュー号ですか、昼の小休止のときですが、成果がないのでよけい疲れている。

2日目3月14日（月）8時45分 JRDA チームと合同で現場到着、昨

日と同じ関上地区です。9時消防本部の指揮下で警察学校の学生と前日のさらに海側地区の搜索開始。救助犬の生体反応生存者なし。10時45分津波警報発令、約7メートルということでした。

搜索を中断付近のビルの屋上に待避、この間運河の向こうを歩いている男女一組を発見、避難を勧告し屋上に収容。屋上から海岸方向を観察するも津波到来の兆候無し、14時午前には引き続き搜索するも救助犬の生体反応、生存者の発見なし。15時40分途中から陸上自衛隊35普通科連隊が搜索済みの表示を発見し、搜索を中止。16時消防・警察の前進本部公民館に移動。待機。以後現場を出発し警察学校に帰着。



警察と協同搜索

2日目の搜索。後ろの方は警察学校の学生と教官の方、多分学生は2日目ですので実習を兼ねて出動しているのではないかと思います。関上地区の入り口付近です。これは津波



市街中心部から関上漁港(東方)を望む

警報があったので3階建てのビルの屋上に待避して1時間程度いたのですが、其の時撮った光景です。こちらが関上漁港ですのでこちらが太平洋で、こちらが名取川です。残って



市街中心部から関上大橋(北西方)を望む

いるのはこのような堅牢なビルしかない。このようなところは良く見たら判ると思うのですが、建物の土台なのです。土台というか基礎部分ですか、その上の部分は全部無くこちらの方に流されまして、障害物で止まって、瓦礫状態になっている。どこかで見た写真だなと思ったら、あの広島原爆投下直後の写真、まさにそのものなのです。よく見るとここは住宅地だったのですが電柱が1本も残っていません。そしてなおよく見ると電柱はまさに津波の到来方向に向かって倒れている。そういう悲惨な光景です。これは丁度反対



市中心部から関上公民館(西方)を望む

側でここが関上公民館です。ここに消防車両が一部止まっています。ここが海のように見えるのは津波の水でまだ水が退いていない状態です。



搜索するエロス号と村瀬英博理事長

これは津波がこちらの方に行った。電柱が倒れている方向。

搜索中の村瀬・エロス号です。まだ残存している家の方はだいたい一階部分まで水が来ていますから二階以上の生存者の確認をとこのように屋根も含めて搜索をしております。



搜索するキュウ号と村瀬真平

これは瓦礫が吹き溜まりのようになっているところに、犬を入れているところです。キュウ号です。はじめてのマニー号は何となく不安そう



搜索するマニー号

にしていますね。搜索を終わって引き上げているところです。この辺はまだ水が残っておりますが道路は全て陸上自衛隊施設部隊が瓦礫をかたづけをしたあとです。



午前の搜索終了

待機地点で休んでいる犬たちです。呉市の消防の車両が停っていますが、緊急消防援助隊が広島からも



被災時刻を示す公民館の時計

来ていました。これは関上の公民館の時計が丁度地震発生直後の14時51分頃で止まっていました。



取材を受ける山田リーダー

この間イタリア、英国、日本(共同通信)からの取材をうけました。

14日の夜帰着後、今後の行動方針につきまして、宮城県警、海自チーム、JRDAチーム、RDTAチームで協議をいたしました。まず発生後72時間を経過し、地震プラス大津波の二重災害の現場の状況から、今後の救助犬による生存者の発見はほとんど期待できないであろう。一方、静岡、山梨、長野と東海甲信越地方に地震が群発している。状況から藤沢の本部に帰還し、新たな災害に備える必要がある。従いまして、RDTAとしては救助犬の搜索は本日をもって打ちきりたいということで調整しましたところ、宮城県警、海自チーム、JRDAの合意を得、決定をいたしました。なお、帰路の輸送便については海上自衛隊チームに便乗するということになりました。

デファイブ：3月15日、火曜日ですが、6時JRDA車両により国際緊急救助隊、ロシアと韓国のキャンプを仙台市の宮城スタジアムに訪



宮城スタジアム(緊急消防援助隊BoO)



国際緊急救助隊のBoO(宮城スタジアム)

問をいたしました。JRDA チームはこの日午前中に撤収。海自ヘリ便が時間は未定ですが、午後設定をされるという事でした。ところが、11時、海上自衛隊から霞目飛行場が汚染区域の為、使用禁止という情報を入手。一方、ラジオ情報によりますとアメリカの空母ロナルド・レーガンの艦載機が放射能汚染で洗浄をしたの情報から、将来共に霞目からの航空便は期待できないのではないかと、そういう最悪の場合を想定し、レンタカーまたは知人車両による、民間のRDTA チームの離脱案を検討いたしました。ところが15時になりました。霞目19時発21時15分厚木着の飛行便が設定をされました。ところがさらに、雨の為、このフライトは中止になりました。

これは宮城スタジアムの国緊隊のキャンプを訪問したところです。こちらがロシア、こちらが韓国。玉川医師が、これは前日に韓国の救助犬が我々の宿舎に泊まっております、出動したわけですが、韓国は偉いんですね。2日目の12日には先遣隊5名と救助犬2頭は到着しております。14日ですか第1日目の



負傷した韓国救助犬の再診
(玉川リーダー)

搜索終ったところが、右足を裂傷して帰ってまいりまして、それを急遽玉川医師が宿舎内で、緊急に8針の縫合手術を行いまして、その状況を翌日、確認をして、経過良好ということで満足をしているところです。これはもう一方、2頭のうちの



もう1頭の韓国救助犬



メキシコ隊の災害救助犬

一方が出動しているところです。メキシコの救助犬チームも同じ宿舎に泊まっております、これは6頭連れてきておりました。6頭のうち2頭は遺体搜索専門の救助犬だそうです。大変朗らかに笑っておりますが、なぜか放射能には神経質でありまして、我々に盛んに放射能は大丈夫かと聞いてですね、なぜか翌日ジャンパーを脱ぎ棄てて、帰ってしまいました。



警察学校 (BoO) 宿舎にて

デイシックス：3月16日水曜日8時、海上自衛隊MH53ヘリ16時40分霞目発で飛行便が設定されました。それがさらに18時20分発に変更され、結局、天候不良のため飛行便はホールド。15時30分に至って本日のフライト中止、以後の調整は仙台駐屯地の自衛隊統合任務部隊 (JTF) が実施、ということになりました。それでデイセブンの3月17日木曜日に至りましてですね、やっと天候回復も見込まれて、海上自衛隊ヘリ便が設定。11時45分霞目発、という事なので10時10分に警察学校を後にしまして、10時53分霞目飛行場に着きまして、12時20分荒天の中、雲の合間を見てMH53ヘリ29号機が霞目飛行場を離陸し、福島原発を100キロ以上離し、大きく迂回をして14時55分厚木基地に無事着陸、放射能検査の結果、総員、人犬共に以上なし、という事で、16時30分本部に帰着致しました。



警察学校 (BoO) を撤収

これは警察学校を撤収し、今から霞目飛行場に向かう時のグループ写真です。犬たちはもうすでにケージの中に入って、トラックに乗ってお



荒天の中霞目飛行場に飛来した
MH-53E 29号機

ります。これは分りますか、みぞれ
なんですね。みぞれが吹き付けてい
る中、霞目飛行場に着陸した29号
機、機体も相当汚れておりますが、
荒天の中雲の切れ間を見て離陸をし
たということです。これは無事、
厚木に到着し、皆さんホッとしてい



無事厚木基地に到着した29号機

るところ。厚木で神奈川新聞ですか、
インタビューを受ける村瀬理事長で
す。翌日の新聞に報道されました。
最後の3枚は犬たちお疲れ様、とい
う事で、キュウ号ですか。泥睡をし
ております。なんかヘルメットをか
ぶってやや気張っておりますが、目



取材を受ける村瀬英博 理事長
(厚木基地)

を見るともうかなり疲労困憊とい
う目をしております。これはもう完全
に、お休みという事ですね、エロス
号。という事で、写真はこれで終わ
りです。

救助犬たちよ お疲れ様



出動報告 玉川チーム



RDTA 理事
MRT 認定グループリーダー
玉川 輝明

私たちが捜索第1日目 (Day3) に派遣されたのは、亶理郡山元町坂元地区でした。ここは、山田さんが報告した名取市閑上地区とはちがって田園地方です。Google の地形図を見ていただくとわかるのですが、津波に襲われた映像で皆さんご存知の仙台空港から、名取市、岩沼市、そして亶理郡亶理町、山元町というふうに南下しますと、まったく同じような地形が広がっています。つまり、海岸から2~3キロにわたって平野が広がり、それから土地が少し高くなっているという状況です。この土地が少し高くなるところを陸前浜街道、それに続いて常磐高速道というように北上して仙台市に向う道筋ですが、この間地形はまったく同

様です。私達が最初の日、午前中に入った、山元町の坂元地区というところは、田園地区です。そしておそらくは、有名な仙台いちごを作るビニールハウスや、水田が、広く広がっていて、その中に、メインストリートを中心に、家屋が点在しているという状況だったと思います。これは想像です。



出発準備

写真を見ながらお話していきます。これは出発の風景ですね。山田さんと私が、千代の別れになるかもしれないという事で、相談している所です。



現場(亶理郡山元町)入口 玉川チーム

これが陸前浜街道です。北に向かっていきます。右側が海で、ここから海岸までは2.5~3キロあります。この浜街道で一応瓦礫は止まっておりますけれども、左側、つまり山側にも瓦礫が少し出ているという状況でした。この地区にはですね、大規模な救助隊は入っておらず、入っておられたのは、地元の消防団だけでした。

小さな河川に沿ってこういう風景が見られるんですけども、市街地ではありませんので、瓦礫の量はさほど多くは、ありません。こういう



現場 (亶理郡山元町)

風に、川の中に車、田んぼの中にちらほらと車が点在してました。この地区にも震災直後のいくつかのドラマがありました。今になってみると、山元町それから、亶理町の辺りの報道もやっと出てきました。大きな自動車学校がありまして、亶理町と山元町の間位に多分あったと思うのです。そこで授業を終わった生徒さんたちが、何台かのマイクロバスに分乗して帰る途中に、津波に押し流されて、亡くなっておられる。それから私どもが行った山元町の山元中学校が高台にありまして、そこで卒業式を生徒たちがやっておられて、地震というので、おじいちゃんが迎えに来て帰る途中に、孫と一緒に流された。そういったドラマがあるんですね。



地元の人から情報収集

この方、消防団の主だった方で、我々が、ご家族の方に頼まれて、捜索に入るという時に、ご自分の車で犬も連れてですね、ここまで送ってくださいました。今、津波警報が出て入れませんので、大島がその時の状況を伺っている所です。

これが、陸前浜街道に向かって、津波によって打ち寄せられた瓦礫で



山元町の搜索

す。ここで止まっています。最初この風景を見て、これずっと海の様なんですよ、海まで見渡せちゃうんです。しょぼしょぼと木が生えていますが、これがおそらく、海岸林の跡なんですよ、海岸林は根こそぎ、ほとんどザーツという、立派な海岸林だったはずなんですけど、海が見えないくらい海岸林が生い茂っていたはずなんですけど、本当に数本の木を残すのみで、みんなこっち側ですね、立派な松の木が打ち寄せられているという、皆さんテレビでおなじみの光景です。壊れた駐在者の建物がありましたので、これは搜索のときにいいメルクマールになるなあと思いました。出勤に地図は持っていきませんでした。現地どこに派遣されるかわからないし、私は、iPadを持っていますので、搜索の際にはこれが役に立つぞ、地図はいらないぞ、というので、一生懸命iPadを担いでいったのですが、私どもが滞在した数日間というのは、3Gの電波がありませんでしたので、残念ながらiPadの地図は役に立たなかったのです。やっと一緒に行動していた、管区機動隊の隊長が持っていらした地図を見せてもらいましたけど、駐在所の建物はですね、500m以上向こうの海寄りだったんですね。それがここまで押し寄せられてきて、全く私が当初考えていた、搜索のメルクマールには、なりませんでしたね。

最初にこの現地に入っただけで、思ったのは何かと言うと、これは0



搜索中のIRO認定犬あかね号

か1だということ。こういうお家を探しても、生きてらっしゃる方は、いらっしゃいません。畑の中、田んぼの中に点在している車の中からご遺体が見つかったり、先程の様な瓦礫の中から、何体ものご遺体が、私達が搜索している間にも発見されて、収容されたり。機動隊の若い隊員たちがこの日最初にした仕事は、昨日、自動車学校の送り迎えの車で、3人ご遺体が出て、2人収容したけど、1人は収容できなかったから、今から収容しますと。あなた方は、適当に計画を立てて、搜索をして下さいという風に、言われました。その位、0か1なのです。生きてらっしゃるか、つまり怪我も無く逃げおおせたか、そうでなければ、亡くなっているかだから、犬がいくら探しても、生態反応は無いのです。



地元の人に搜索を依頼をされて移動

これは午後の搜索です。ご家族の方が、田園に広がって一生懸命遺品を探しています。手袋があったり、帽子があったり、おじいちゃんが履いていたサンダルがあったりするんです。ご家族の方はそれを見つけてるんですけど、ご遺体は無いんです。そういう方がずっと田園の中に、点

在していらっやって時々、消防や警察無線から入る津波警報をもって我々が、津波警報が出た！退避、退避と言ってですね、浜街道まで退避する。見ますと、海の向こうに黒い筋がずっと、波が起っているのが、3キロ遠方からでも見えるという、恐ろしい光景です。実はこの林の向こうに、人家がありまして、お嫁さんは車に乗って逃げた、そのお嫁さんのお姑さんと、義理のお姉さんは次の、別の車で後ろから逃げてきた。バックミラーで見たら、津波が押し寄せてお姑さんと、義理のお姉さんの乗った車は、後をついて来ない、津波がどんどん来るから、お嫁さんは逃げて、命からがら助かったという、ご家族がいますよね、もしかしたら、この向こうの家に、生存しているかもしれない、だから是非、探してみてください、と言う事ですね、頼まれて1.5キロぐらい津波警報の合間にですね、あぜ道を歩いて行く所です。



搜索依頼された現場

このお宅ですね、2階建のお家でしたけど、1階部分は瓦礫。倒壊はしていないんですけど、瓦礫が押し寄せて、全く手が付けられない状態でした。2階部分を、村山とランディーが搜索しました。生存者はおりませんでした。1階部分の瓦礫を、大島とあかねが搜索しまして、生存反応はありませんでした。その様に、ご家族に私がチームリーダーとして、告げました。生きていらっしゃる可能性は、私どもの救助犬が搜索をして、生態反応がありませんので、

生きている可能性はほとんどゼロであると思いますと、生存者はここにはおりません、という宣言をしました。その時、女の人が呼ぶ声がするんですよ、一緒に行ったご家族の名前を呼ぶ声が「ああ、姉さんかもしれない」と言って、行ってみたらそうじゃない、上手く逃げる事のできたお嫁さんがもう気が気じゃないわけですよ、林の向こうまで、自分で歩いて行って、捜索をご自分でなさった、そしたら姉さんが乗った車があって中に2人のご遺体があって、それを「居たぞって」言って、お嫁さんがご主人に知らせた。そういう悲しい出来事がありました。若い機動隊と一緒に行きましたが、すぐ津波警報が出て、今度は北に向かって歩き、すぐこの山に登って、帰りはぐるっと回って遠回りをして、帰ってきました。



津波による被災状況（山元町）

これは今のお宅に向かう途中のそのおそらくは、田んぼと畑と、おいしいイチゴを作る様な、ビニールハウスが点在していたような土地に、このような惨たらしい津波の跡が残っています。



巨理署と協同

これは山に登って、このお家だけが、ちょっと地震でもって倒壊しておりましたが、お怪我なされた方、お亡くなりになった方は居ませんでした。この向こう側に、ここに水平線が見えるわけですよ。この山の上まで、津波が来ておまして、これは（家屋手前の瓦礫）津波が運んだものですね、おそらく海拔15～20mぐらいはあったと思いますけど、これよりも標高が上の土地にも、谷戸になっている部分に津波が押し寄せていて、瓦礫が散乱しておりました。

これも帰りに。この山に登って我々は、退避をしながら、帰って来たという状況です。

DAY4の捜索二日目には巨町荒浜地区、山元町より北の方面に入りました。そこは山元町よりは田園ではなくて、市街地が広がっている場所でしたけど、前日にはまだ水が腰や胸まであって、全く捜索が入っていないという、土地でした。ただ、わりと市街地なので、DAY4には、各地の消防、自衛隊が我々と同時に、投入されていました。ただし、誰がどこを捜索したのか、メルクマールが全くないので、我々は、海自のチームと一緒に、森田1等陸尉のチームですけれど、一緒に行動しました。それぞれメインストリートの左右を分け合って、200m位まで捜索しましょうと言う事で、捜索を始めました。かなりまだ水があって、ずぶずぶ潜るような道でしたけど、犬を後に従えて、私が、ご立派な屋敷林のある旧家に入って行きましたら、「誰か居ますか」と声をかけましたら、おばあさんが障子を開けて、「おはよう」と言って挨拶をしてくれました。つまり、三日に渡って津波の被害から2階に上って難を逃れていた、老夫婦も犬ではなくて、残念ながら私が発見しまして、皆でそれからお助けしたのです。おじいさんは、

頰椎の脊柱管狭窄症という病気で手足がご不自由で、それでも2階に退避して、何とか三日間をお二人で、飲まず食わずで過ごしておられました。奥さんはお元気で、まずは、奥さまを収容しましょうと、一緒に、もう瓦礫に埋まった1階を乗り越え乗り越え、退避した。ご主人は、消防に頼んで、ストレッチャーでも持って来て、後でという事でしたが、その本当にその時に、巨大津波警報というのが出まして、8mの津波が来るというので、とてもまだ、泥が溜まっている様な道で、おばあさんを連れて6号線までは逃げられないと思ひまして、しっかりした新築のお家の一軒が残っておりましたので、その家の2階に避難させて頂いて、1時間近くその場で、退避しておりました。津波警報が解除されましたので、やっと命からがらと言いますか、大変怖い思いを、私と大島と、若い機動隊員はしましたけれど、無事にお助けすることができました。

実はその後の中々、ドラマがありまして、体のご不自由なおじいさんを、おうちの二階からどうしてもどうしても降ろせないというので、同行した海自チームの隊長さんが、陸上自衛隊の森田1等陸尉なのですが、森田1等陸尉はレンジャー出身ですので、ずっと携えていたロープでおじいさんをおぶひまして、そこにあった梯子をずっとつたって降りて、救出したという。私なんかは、何とか消防に頼んで、ストレッチャーで降ろしてもらおうなんていう風に考えていたんですが、森田さんは、森田さんなんで、そんなロープ何で持っているの、というロープをですね、携えておられたのですが、「これが役に立つんですよ」と言っておられたのです。それが、実証された、お見事な救出でした。

と言う事で、我々の2日目の捜索



巨理警察署にて RDTA チーム

は終わりました。

私どものチームですね三頭三人、横にランディがいて、アガタ、あかねですね。先程、紹介しませんでした、この方が、アガタのハンドラーで田中さんです。村山訓練士、大島訓練士これは、現地対策本部である、巨理警察署の裏で、待機している時に撮影した写真です。



巨理警察署内にて海上自衛隊・呉チーム

自衛隊チームですね。自衛隊は2頭の犬を連れて来ていましたが、これも我々の試験に受かった、極めて優秀な救助犬です。さすが自衛隊というのは、チームリーダーだけでなく、補給・通信のバックアップメンバーがハンドラー以外に、チームの構成員として、活躍していました。これは大変参考になる事例だと思います。自衛隊では当たり前



荒浜地区

なっていますけど。我々としてももっとバックアップの手がほしいなど、今回は実感しておりますので、大変参考になりました。

これはおばあさんを助けて、さらに奥に進もうというので、瓦礫を乗り越えてここまでできましたけど、これ以上は進めません。まだまだ水が深くです、進めないというところまで探索しました。



津波警報で避難した人家の2階から

これは退避したお家の2階から撮らせて、頂きました。これが、常磐高速道ですね。(写真右奥)この辺に消防車が見えますけど、ここに皆、退避してしまっていて、「おーい早く帰って来いよ」って言われるのですが、だいぶまだ、500m以上ありますので、お年寄りを背負ってはですね、中々行けませんので、ここに一時、怖々退避してたという状況ですね。ちょうどその時に、原子炉が爆発した、という警察無線が入りまして、そうしたらこれもドラマですね、南の風がぶわーっと吹いて来て、これは核の嵐ではないかと言って、私が隊員の恐怖を煽ったりしてですね、冗談のつもりだったのですが、冗談になりませんでした。



避難した高速道路の上から

6号線の上から、各陸上自衛隊、消防、警察、我々が県の官機動隊の車で、ここまで乗せてきて頂いて、一緒に行動した車です。各地の消防が入っておりまして、この向こうに中学校があって、消防の本部になっておりました。残念ながら消防、警察、自衛隊の相互の関係と言いますかね、協働する様なシステムは、まだ確立しておりませんでした。



荒浜地区 午後の搜索

これは活動をもうじき終るといふところで、村山訓練士とランディ、大島訓練士とあかねが、この光景に圧倒されながら疲れきって歩いているところです。本当に疲れたところですね。

大きな怪我をしてですね、体が挟まれていて、犬が見つけたという事例は残念ながら、我々のチームでも、山田のチームでも、それから他の救助隊でも今回の災害に関しては、聞きませんでした。

自衛隊のチームと、我々のチームがこれで、ミッション終了だねというので、最後に撮った写真です。



搜索を終えて

出動報告 所見・提言



救助犬訓練士協会
国内渉外担当
山田 道雄

それでは続きまして、所見及び教訓的事項について申し上げます。

〈所見〉

まず全般ですが、今回の出動は神奈川県警を通じて警察庁からの要請という事で、そういう事もありました関係上、これは民間の救助犬チームとしてはたぶん初めてのケースだと思います。全期間を通じまして捜索を活動、後方支援共に組織的な活動を実施できました。

特に宮城県警察学校を BoO として宿泊、給与、通信連絡、輸送、犬の管理と万全の態勢を敷いていただきまして、大変不安なくですね、捜索活動に従事できた。

それから、初めて公的機関、まあ

海上自衛隊の救助犬チームと同一行動したこともありまして、往路復路の輸送についてはですね、陸上自衛隊、海上自衛隊のトラック、あるいはヘリコプターといった全面的な支援を得まして、特に迅速な現場進出が可能になりました。

お世話になりました、警察庁、神奈川県警、宮城県警、陸上自衛隊、海上自衛隊の関係者の皆様には、この場をお借り致しまして心から御礼申し上げます。

2 番目に救助犬の運用についてありますが、今回の捜索現場はですね、先ほどのスライドを御覧なったらよくお分かりかと思いますが、地震被害に加えてですね、津波の被害、どちらかというですね津波の被害の方が更に大きいんですね。したがって、生存者はほぼ、絶望的と、現場を見た瞬間からそういう風に思っておったわけですが、結果的にもですね、全てにチームにおいて救助犬による生体反応、生存者の発見という事には至りませんでした。

一方ですね、私どもは 24 時間以内の現場進出を果たしたわけですが、ドイツのその日の午後は、待機という事で残念ながら迅速な捜索開始を果たせませんでした。

この反省としましてはですね、前の岩手・宮城内陸地震の時の教訓ともダブルの訳ですが、早い段階で救助犬に適する現場の選定と集中運用というものがされる必要があるだろうと。

そのためには、対策本部に私共の救助犬チームの代表をスタッフとして派出すべきであったかなど。このスタッフの職務としては救助犬の運用に対する対策本部に対する助言と、民間のボランティア等である救助犬チームの取りまとめ。今回はたまたま JRDA さんが、私どもを頼って来られましたので、この二つの団体については、合同でこう、

色々調整が出来たのですが、今後ともは全ての救助犬チームについては、そういった配慮が必要であろうと感じております。

次は現場における共同要領ですが、私ども救助犬チームはあくまでも救助機関である警察・消防・自衛隊に帯同して、その指揮下に入っております。ところが、捜索の一翼を担う訳であります。ところが、救助機関、この警察・消防・自衛隊間においても、このような被害激甚災害においても、統一指揮下になく、あくまで協同関係であると。したがって情報共有がなかなかうまくなされていないということを実感として持っております。

その一例として、報告の中で申し上げますけれども、その現場に行ったときにこの捜索現場はどこの部隊が捜索して、どのくらい、どういう状態だったのかというそういう表示をする、マーキング要領というのが INSARAG ガイドラインには決まっております。私どもはそれを勉強しておりますが、実際にはですね、例えば陸上自衛隊の入った後に、ガムテープがあって、そこに『35i』と書いてあんですね。『35i』ではですね、これはまあ、35 普通科連隊が捜索したという記号だと思うのですが、これでは誰もわからないだろうと。やはり、INSARAG によると、大きな 1 平方メートルくらいの大きな場所にカラスプレーでマーキングを下さい。それを見れば、この場所です。どこの部隊が何時から何時まで捜索し、生存者が何名いて、遺体を何体収容し、あと行方不明者が何名いるというのがわかるようになっています。したがって次の後続部隊が入っていても、いわゆるそのマーキングを見るだけで、作業に移れるようになっております。それを警察も、消防も、自衛隊も共通のものがない。

国際緊急援助隊で入ってくる部隊はですね、それを勉強しているはずで。現に、村瀬 理事長がインドネシアに行った時はそのマーキングがされていたと、言う事ですので、そういう配慮が我々と国内でも必要であろうと。あと、無線機もそうですけどね、津波警報の伝達がありましてけれども、それぞれ警察・消防・自衛隊がそれぞれの違う無線機で違うネットを使っています。

次は私どもの出動装備、機材等についてなのですが、今回、天幕、発電機、全てフル装備で携行しましたが、幸いに警察学校での支援体制が非常に万全であったためですね、そういうこともありまして、不安、不具合はありませんでした。ただ、私どものミスですが、日本財団さんに助成頂いた耐震防水仕様のスペシャルノート型パソコン、ソフトウェアの不備の為にですね、持っていきませんでした。それから VTR は持って行ったのですが、充電装置を忘れました。警察学校には充電する電源くらいは確保されていました。それから、これも日本財団の助成で頂いたのですが、膝当て肘当て、これは非常に今回、初めて使ったのですが、これは大変な瓦礫の状況の中で大変有効でありました。欲張りな話ですが、将来の装備品として、初動段階で結局携帯も固定電話も使えないという状況が長時間続きましたので、衛星電話、または防災用の携帯の電話、水のろ過装置、個人携帯用放射線量計こういうのもあればありがたいなど、いう要望であります。

次に後方支援その他について申し上げます。今回は、往き帰りを自衛隊の輸送能力にお願いしましたので、車を持って行けなかったのですが、やはり、現地においてはですね、独自の機動力、輸送力の確保と

いうのが必要だろうと。例えば、名取市から仙台市にある対策本部までちょっと行こうと思っても一時間かかるわけですよね。その時に非常に忙しい警察の車両とか自衛隊の車両はなかなか頼みにくい。その時に自分の車を運転して行ってですね、対策本部にスタッフを送るとか調整をすれば、もっと効率よく出来たのかなど。その反省としてはですね、第二陣として陸路、後方支援要員、これは記録要員、あの VTR の撮影要員とか実際に写真要員というのはなかなか兼務できないのです。こういう記録要員を含めて車両で進出すると。こういう配慮も必要ではあったかなど、いう反省です。それから出動チーム要員は、私どもの今回のチーム要員は 2 名を除いていずれも日赤救急員、まあ、防災士も当然この資格を持っているわけですが、玉川医師が臨時に色々緊急手術的な事をした、そこまでは至らなくても、基本的な救急処置ができるためには、その資格の取得、更新が望ましいと、これも教訓であります。

最後に、提言という事で時間も押し迫ってまいりましたが、これは正確を期すためですね、わたくし報告書の本文そのものを読みあげさせていただきます。

〈提 言〉

東日本大震災の防災全般にわたる教訓的事項については、阪神大震災と同様、国として徹底的に検証、分析され抜本的な対策が検討されるものと思いますが、その資とするためにも救助犬分野について若干の提言をさせていただきます。今回の未曾有の大震災に対して海外からも数十頭の災害救助犬が救援のため派遣され、阪神大震災の時と同様世間の関心を集めました。わが国における救助犬の出動体制は官民共に不十分

であり、およそ「防災先進国」とは言い難い現状にあります。まず、諸外国では軍又は消防等の公的機関が救助犬を保有し、災害時はこれを中心として民間の救助犬チームが支援する体制となっています。しかしながら、わが国においては正式に災害救助犬を保有する公的機関はなく、僅かに警視庁が国際緊急援助隊用も兼ねて約 3 頭を保有しているに過ぎず、とても広範囲な被災地域における 24 時間連続の捜索は不可能であります。自衛隊では航空自衛隊が歩哨犬を、海上自衛隊が警備犬をそれぞれ数十頭保有していますが、救助犬の資格（IRO 認定国際救助犬）を保有しているのは海上自衛隊呉造修補給所貯油所の警備犬 2 頭のみであります。消防は災害救助犬を保有せず、またその計画もないと聞いています。一方、阪神大震災以降、民間ではかなり熱心に災害救助犬の育成が行われていますが、それぞれの犬関係団体がそれぞれの基準を作り認定しているのが現状であります。したがって、現在国内に約 300 頭居るといわれる救助犬のうち、これまで災害現場に出動してくるのはわずかに 10 数頭でその能力の格差も大きい状況にありました。今次大震災でも初動段階で現場に出動した救助犬頭数は、海外から救援に派遣された救助犬頭数と大差ないものと思われれます。このような現状に対し、まず国としての災害救助犬の出動体制を構築することが必要ですが、そのためには、警察、消防、自衛隊等の公的機関に救助犬の運用部門を確立し、その後あるいは併行して民間とのネットワーク化を図りつつ、官民一体となった運用体制を構築するのが望ましいと考えます。この際、救助犬の認定基準には、官民共通して適用されかつ国際的にも通用する国際救助犬連盟（IRO）/ 世界蓄犬連盟（FCI）救助犬委員会の定めた基

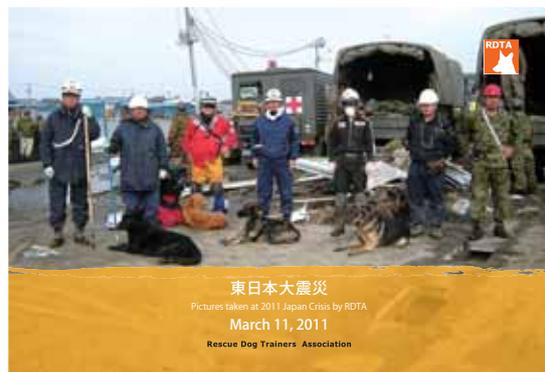
準を採用するのが適切と思われます。「最悪の事態に備える」のが危機管理の要訣であり、今次震災において改めて教訓としたところであります。しかし、質の高い救助犬の育成には少なくとも約2年は要し、その稼働期間も4ないし5年と短く、訓練士やハンドラーの養成も決して容易ではありません。常続的に一定数以上の民間の救助犬を育成確保するためには、補助犬（盲導犬、聴導犬、介助犬）と同様、国が民間に助成する仕組みが不可欠となります。

一方、国内で大規模震災（地震の場合、震度6以上）の生起する頻度

は数年に一度ですが、アジア・太平洋地域あるいは世界規模で見ればほぼ毎年のように発生している状況にあります。これらのことは、救助犬の保有、運用を一国の災害救援という観点のみでなく、国際公共財的な視点から検討すべきことを示唆してくれます。費用対効果的な国の施策としては、まず国際緊急援助隊チームへの編入を念頭に公的機関（警察、消防、自衛隊等）が国際レベルの救助犬を育成・保有する体制を確立し、それと並行して国が民間における国際レベルの救助犬の育成・保有を助成、大規模震災発生の際には、国内

はもとより海外への国際緊急援助隊のチームとしても官民一体となって運用できる体制を構築することが適切と考えます。以上、国としての抜本的な対策検討の資とされますよう提言させていただきます。

という事で大変差し出がましいようですが、最後のところは、誤解があると困りますので、読ませていただきました。以上を持って発表を終わらせて頂きます。どうも長時間ご清聴ありがとうございました。



救助 関係機関



海上自衛隊呉造修補給所
貯油所 保安科長 1等陸尉
森田 康博

私としては一番感じた事は、発見率が低いであろうと思われておりましたが、理事長の話を聞きながら生存者をしっかり捜していこうという熱意に駆られましてチーム一丸となって救助犬訓練士協会と共に臨む事が出来ましたのも日頃からのお付き合いのおかげだと感謝いたしております。

その中でチームリーダーとして感じました事を忌憚無く申し上げたいとおもいます。

救助犬を被災後72時間以内に被災地入りさせる事はきわめて困難な事ではありますが、このたび呉地方総監の派遣指示により迅速に準備し出動いたしました。

自衛隊ではボトムアップ方式とトップダウン方式というのがございます。このたびは上からのトップダウンで雲の上から言われました。地震が発生して津波が発生しこれはいかんとテレビでみて、夕方にはもう出動準備を整えて夜中にフライトした状況でした。

二つ目は救助犬訓練士協会および宮城県警機動隊捜査員と合同捜索を行い、比較的広い範囲の広域捜索が行えました。普段は瓦礫の訓練場で小さな訓練をやっており、テロ対策のため広域訓練の経験もありますが、人命救助をこれだけ広範囲に被災されている場所の捜索はまたと無い機会でありました。それから3月13日の午後なのですが、陸の孤島とかした宮城県北部の女川町に13日午後ヘリコプターで到着いたしました。このときは陸上自衛隊の先遣部隊よりも、早く現地入りをして、捜索を行いました。宮城県警の機動隊員と捜索地域に入って行ったのですが、ここの場所は役場が被災しております、小学校に応急的な現地対策本部があるだけで、「あっちの方面に行ってください。500～600mくらい歩けば、見えますので、そちらの方をお願いします。」といった感じの現地対策本部です。陸上自衛官から言わせると、この地図の、この付近をしっかりと捜索して下さいと、割り当てがあると思っていたのですが、「あっちの方に行ってください」という世界でした。まさに初めて自衛隊がですね、そこの被災地の顔を見たという状況でした。我々が機動隊員と一緒に捜索を終えて、その日の最終フライトがある為に、元の位置に帰ろうとした時に、捜索場所を定められずにいる陸上自衛隊の50～60人が来まして、私は陸上自衛官ですから、頭は赤いヘルメットで海自のヘルメットをかぶっているのですが、首から下は迷彩服を

着ておりますので、直ぐに話を通じまして、現地住民の話を聞いて、30mくらい高い所に、列車が打ち上げられておりましたから、その付近に沢山遺体があるらしいのでそっちの方にすぐ陸上自衛隊を行かせました。すぐ30分くらいでご遺体を沢山発見できたのですが、現地における調整は、非常に大切だと思います。誰それとなく話をして行く、玉川先生チームリーダーは誰とでも話をするのです。とにかく情報収集の長けた方です。私も誰とでも話をします。とにかく話をすることで情報交換をして、自分達の活動がしやすいように、現地で活動していきたいと思えます。

次に海上自衛隊の救助犬訓練施設について説明します。救助犬の養成で最も注目されるのが瓦礫訓練場です。

単純に不整地を造るのではなく、本当に犬が恐がって入らないのですが、あえて暗い通路を造っております。

陸上自衛隊ではこういう黄色い車の様にですね、官用に使っていた車を使うという事はあり得ないのですが、少し海上自衛隊の方が、スケールが大きいので、廃車を転用させて頂いております。左下にコルゲート管と言われるものの中に、暗室を造っているのですが、ペットボトルが何百個と入っています。そのペットボトルを泳いでいくように進まない、救助犬が中に入れないうまっています。光物に弱い動物の心理を追及して、この様に入りにくい物を造っております。最近よく、広島県警鑑識課と、東広島にあります、村上訓練所所長以下が、訓練に来られます。最近では広島県の警察犬訓練所の方々が、ここを使って、瓦礫捜索に興味を持ち始めておられます。昨年、6月に中国・四国ブロック、消防緊急援助隊合同訓練というのがありまして、それに初めて救助犬が参加致しました。中国5県と四

国4県につきましては、救助犬が吠えて告知した所にレスキューが作業を開始するという訓練ができております。今年には10月に広島県の福山で同じ様な訓練が予定されておりますし、8月25日には広島県の主催で、防災訓練では犬に、簡単な瓦礫を造って告知させる防災訓練を行っております。



基礎的瓦礫搜索訓練場の景況



服従・熟練訓練場の景況

画面左側に変ったトンネルが見えるのですが、私どもの職場は燃料ばかり持っておりまして、トンネルタンクというのがありまして、こういった暗いところも犬に恐怖感がありますので、トンネルの中でしっかりと搜索訓練を行っております。長さが200メートルもありまして、タンクがいっぱい入っております。手前の方には青いリフトの様なもの

ありますけど、リストと言いまして、ヘリコプターから犬を吊るす時に動揺しないための、訓練を行ったり、パレットを組み合わせた中に人を隠し、基本的な搜索ができるように訓練を致します。これらができた犬を本格的な瓦礫で訓練させ、富士見高原に連れて行き、村瀬さんのところで試験を受けさせてもらうという様な流れを行っております。



平成23年6月22日現在の犬舎の景況

最近では犬舎にシェパードが17頭おりまして、夏はうだる様な暑さの中、犬もぐたっと来ますので屋根を造ったりしています。年老いた犬を屠殺するわけには行きませんので、亡くなるまでは、きちんと飼育します。犬舎の養護柵も自ら造ります。柵を買ってきて施設科の職員に造って貰います。訓練士も自ら施工を行います。できるだけ人力を使って造るようにしています。犬は死んだら必ず、葬りますし、慰霊祭も行います。今年の12月頃も慰霊祭を企画しています。

先程申し上げました、自己確保とか人命救助に必要なロープ訓練なの



人命救助は、1にも2にも基本・基礎重視の真剣勝負

ですが、左上のジャンパーを着た人が航空自衛官です。当職場には、陸・海・空の隊員がいます。こちらは海上自衛隊です。教えているのが陸上自衛官です。



救助者は、ゆっくりと膝を伸ばし、十分な制動を掛ける。

女性の事務官を患者に見立てて、搬送する。こういった訓練を緩斜面からやっていると、垂直降下もできるようになりますし、ヘリコプターからも降りる事もできるようになります。別に体力がなくてもいいのです。少しずつやり方を教えてあげれば、レンジャー隊員でなくとも、訓練さえやれば上手にできるようになります。少しずつ積み重ねて行きたいと思います。

救助 関係機関



藤沢消防署 警備2課
高度救助隊 隊長
塩澤 雅司

今回、災害救助犬の活動、本当にお疲れさまでした。

私もこの度の震災で、神奈川県消防緊急援助隊の派遣要請を受け、第一次派遣隊として宮城県仙台市若林区に行き参りました。仙台市の町の状況はと言いますと、建物は地震による座屈。倒壊により窓ガラスが割れていたり、コンクリートの壁が一部壊れていたりしていましたが、壊滅的な状況とは見えませんでした。

しかし、常磐東自動車道の仙台東インターから、今回の活動拠点の仙台若林ジャンクション、こちらに近付くにつれて風景が一変致し津波で被災した場所は、色がありません。まるで白黒写真を見ている様な壊滅的な感じでした。この風景を目の辺

りにし、隊員皆言葉を失いました。津波によって流された、家と瓦礫の山。水田は、一面泥に変わっておりました。私達が今回救助に向かった場所は、海から近く、水田風景が広がり、集落がある場所でした。活動場所付近まで車による移動ができず、徒歩にて資機材を携行して行動しましたが、足元が泥と海水で、踝まで埋まってしまう、瓦礫も障害物となって非常に困難を極めました。要求者に会っても目視では発見できず、泥に埋もれていたり、瓦礫の下にいたりしたので、ほとんど手作業での救助活動でした。救助活動にあたっては、13日と14日の2日行いました。

14日の出来事です。先程、皆さんの報告があった通り、この日は、藤沢消防、川崎消防、後三重県隊と合同で、13日の活動区域よりもさらに、海側に面している、若林区、三木塚付近の住宅地の救助活動となりました。この地区は、車両が待機している、活動拠点の若林ジャンクションよりも海側に2キロ程、行ったところなのですが、車両は瓦礫の障害で入れないので、徒歩で向かいました。現着後、神奈川県隊の指揮本部から無線で、大津波警報が発令、救助活動を中止し、高台か、建物に避難の無線が入りました。三重県隊、川崎隊、藤沢隊が合わせて50名程いたのですが、それぞれ分散、民家に避難致しました。津波の高さは皆さんが言っていた通り、8mという情報が入り、木造二階建ての二階の屋根に、避難致しました。屋根の上にもたがって退避していると今度は、福島原発で爆発事故が発生したと、無線が入りました。8mの津波と原発、もしかしたら、助からないかもしれないと、頭を過りました。その時思ったのは、目の前にいる4人の隊員を危険な目に合わせて、ご家族に申し訳ないという気持ちと、自

分の家族の事を思いました。この時の隊員の様子は、決して慌てることなく、この様な状況下でも皆で乗り切ろうと前向きな姿勢が、ひしひしと感じ、同じ部隊のチームとして、心が一つになった様な気がしました。しばらくすると津波が誤報と分かりました。指揮本部のある、若林ジャンクションに一旦戻り昼食を取りながら、隊員にあの時何を思ったか聞いたところ、皆口々に家族、妻、子供の事を思ったと、言っておりました。人は危険な目に会いますと、多くの者が家族を思い、家族を支えているんだという事を実感すると思いました。今回の緊急援助隊で感じた事は、阪神淡路大震災の様に、直下型の震災で、座屈した建物に要求者がいて、敷材に遭っても、我々消防が所有する高度資機材を活用、救出活動ができるのですが、津波によって全て流された状態で、泥と瓦礫が障害となる広大な水田が続く場所での救出作業は、重量のある、資機材を使う事はできないと実感致しました。消防車両が入れず徒歩の移動のため、体力の消耗も激しく、限られた資機材しか携行できません。こういった場所でこそ、災害救助犬が活躍できると思いました。そして災害救助犬と救助活動ができていればもっとスムーズで、スピーディーな救助活動ができると実感致しました。今後、消防と災害救助犬との連携は、必要不可欠だと私は感じております。今回壊滅的で、甚大な被害をもたらした津波は、人も家も、思い出までも全て流し、町の復興・復旧、と人の心の復旧、復興は険しいものですが、日本全国民が一体となって、乗り切っていかなければならないのだと実感致しました。そして私、永年救助という仕事をしていますが、改めて人の命の尊さ、家族の存在、家族の支えを実感致しました。以上で、ご報告を終わります。

救助犬 チーム



NPO 法人 日本救助犬協会
川合 一夫

今回の出動にあたりまして、改めて RDTA の皆さまにこちらの方こそ「ありがとうございます」とお礼を言いたいと思います。

また、大船渡と陸前高田におきましては救助犬チームを出して頂いた各救助犬団体の方々にもこの場をお借りしてお礼を言いたいと思います。

これに伴いましてコーディネイトをして頂きました、野地さん立って頂けますか。私は、現地の方に行っておりましたので、横浜にいる野地さん※にお願いを致しまして、各団体に連絡を取り、調整をして頂きました。

今回、陸前高田では、救助犬団体、5 団体での合同検索が出来まして、今までになかった成果だと思い、今後に繋がる事と喜んでおります。

最初の発災の事は、山田隊長からお話をして頂いたので割愛させて頂きまして 今後についてですが、私も帰ってから色々な団体の代表の方と話し合いをしました。今回は、各

現場でだいたい 2 団体ぐらいで合同検索をしていたと聞いております。

皆さんも今まで阪神淡路大震災以降 15～16 年経ったなかで、国とのつながり、各行政とのつながりの部分が、出来ていたと思っていたのですが、実はできていなかった事を今回、改めて皆さんも思ったのではないかと思います。

それに伴い、先ほど山田隊長の方からもお話が有りましたが、全国の救助犬団体が一つになり、国へのお願い、また諸外国の様に海外にもスムーズに行ける様に、皆さんのご協力を得て、もう一歩二歩、前進していきたいと、思っております。

他の事は、森田さん、山田隊長、村瀬さんからもお話が有りましたので私の話はこれで終わりにさせて頂きます。有難うございました。

※野地義行アジアワーキング
サポート協会

RDTA 出動隊員から 一言

村瀬 真平(救助犬訓練士協会 救助犬訓練士)

今回捜索に入ったどの現場でも救助犬に対する認識ですとか、我々の犬がどんな能力を持っているのかという事を把握されていない方々がほとんどでした。まず我々の犬がこの大災害現場においてどんな事が出来るのかという説明からさせていただきました。僕はこの事にびっくり致しました。あらためて今後一層努力をして救助犬の技術・能力等の認知度をあげていきたいと思いました。今日ご出席の皆様は救助犬の活動に高いご理解をお持ち頂いている方々ですが、なお一層のご理解とご協力をお願いしたいと思います。



村山 健太(救助犬訓練士協会 救助犬訓練士/防災士)

出動しましたその中で想像以上に津波の被害が大きいという事と、あまりの広い範囲で正直どこから手をつけたいのかが、わからないような状況で、想像以上の被害を受けていました。最初の一日目、地元の方の案内で行った場所でここを捜して下さいといわれ、一軒の民家を探しました。その時の捜索はいつもの試験とかそういうものとはやっぱり違いました。とにかく被災地は範囲が広く、移動も朝から晩まで歩き、また次のところまでも歩いたりしなくてはいけないので、人も犬も体力が消耗しました。そして二日目の日に、ちょうど老夫婦を発見した後に津波警報が出ました。その時8メートルと言われ正直凄く恐怖を感じました。テレビで映像を見たりしていたのでとても強い恐怖を感じました。そしてこれからは自分の精神力も鍛えるように、頑張りたいと思いました。以上です。



村瀬 裕太(救助犬訓練士協会 救助犬訓練士)

最初出動の予定はなく、メンバーではなかったのですが、要請が8名6頭と言う事で、所長に地震直後から自分も出動したいという事を言っていました。自分の経験になるという事もあったのですが、所長の父が見ている風景とか、目指しているものを体感したいというのが一番の思いでした。今回ちょっと無理を言って、一緒に参加させていただきました。自分の想像以上の現場でした。やはり、かなりショックも多くて、本当に自分の無力さと、津波の恐ろしさを身をもって体感しました。先ほどお話にあったようにご家族から直接探してくださいと言われ、何も反応が無い時などやっぱり、自分たちのこれから目指すものがどれだけ過酷なものかというのが、今回良くわかりました。これからも一層頑張って父の目指す救助犬を目標に、努力していきたいと思いますので、よろしくお願いたします。



質疑応答

回答者
RDTA 理事長

村瀬 英博

質問者

海上自衛隊 幹部学校教育部長 1等海佐 岩田高明様

「遺体捜索と生体捜索の違いについて。」

基本的に私たちの犬は、生体探知犬です。生きた人間は体臭を常に作り出しています。それを揮発性脂肪酸と言います。酪酸や酢酸に分類されるものですが、それと同時に、鼓動、吐息、などから生まれる気配、それを人と感じて吠えて知らせるのです。遺体探知となると少し違います。犬によって意識付け方法は異なりますが、いわゆる物探しに成ります。単一臭気を強く意識付けるのです。ですから専門犬が良いと思われれます。震災出動の後、フランスで開かれたIROのシンポジウムで、イギリス国家警察の遺体探知犬班が発表をしていますが、やはり専門犬でした。その後台湾に、試験とセミナーの為呼ばれましたが、彼らも、遺体捜索犬を持っていましたが台湾の犬は両方こなせると言っていました。しかし、ハイチの大地震では、車から降りた瞬間腐敗臭に包まれるため犬はその臭いに反応しなくなって閉ったそうです。本来、両用犬の場合告知の形を変えて教えます。もし我々が遺体探知の専門犬を作ろうと思ってももとに成る遺体臭気を所持する事が出来ません。日本では、遺体を扱える機関として警察が有りますが警察犬担当者にとっても、遺体臭気の所持は難しいようです。我々RDTAとしては、生体探知犬ですら足りない状況なので遺体探知犬を作る予定はない。

「今回の現場で、遺体に反応した犬達は どうして分かったのですか？」

今回は、比較的寒い時期に寒い地域で災害が起こったため腐敗の進捗が遅くかすかに残る人としての臭いに反応するも、鼓動や吐息を感じられず告知まで至らない、しかし、その微妙な変化をハンドラーが見極め捜索隊に知らせた結果として数体の遺体を探し当てる事が出来たのではないかと思います。



■質疑応答については十分な時間が取れず会場の皆様にはご迷惑をお掛け致しました。

本報告会要旨は、藤沢市総務部災害対策課危機管理監井坂敏之氏が報告会会場に於いて撮影されましたものをご了解ご協力を賜り、作成いたしました。

東日本大震災に対する出動 報告書・同報告会要旨

発行

平成 23 年 9 月 20 日

発行元

特定非営利活動法人 救助犬訓練士協会

〒 252-0822 神奈川県藤沢市葛原 766-1

TEL : 0466-49-3220

デザイン・印刷・製本

株式会社 博秀工芸



Rescue Dog Trainers' Association



正誤表：

36頁、掲載文章の最後

正： ※野地義行 （社会福祉法人）アジアワーキングドッグサポート協会

誤： ※野地義行 アジアワーキングサポート協会

著作権及び引用に関して：

- ・本報告書の著作権は特定非営利活動法人救助犬訓練士協会にあります。
- ・本書をそのままの状態ですべて資料としてPDF形式で無償で配布される場合を除いて、その他いかなるご利用にも当協会の承認を要します。
- ・当協会の許可なく本書を印刷し有償無償を問わず配布する事を禁止します。
- ・いかなる場合でも本書の編集を禁止します。
- ・本書の引用（一部を除く）に関しては可能ですが、その場合は必ずクレジットを併記してください。
- ・本書18ページ及び「東日本大震災救助犬出動報告会」の発言を収録した部分の33ページから36ページの引用には、発言者の許可が必要ですので同ページ文章の引用は原則的に禁止します。

以上

特定非営利活動法人救助犬訓練士協会

神奈川県藤沢市葛原766-1

Te l : 0466-49-3220

メール： hq@rdta.or.jp